

環境文化の島を訪ねて

(鹿児島県屋久島)

本誌編集部

平成五年一二月、亜熱帯から亜高山

帯まで植生が連続する特異な生態系や樹齢千年以上の杉が生育する自然美が認められ、屋久島は白神山地とともに日本初の世界自然遺産に登録された。

令和五年一二月に開催された記念シンポジウム(本号「巻頭グラビア」参照)では、「屋久島環境文化村構想」(平成四年一二月鹿児島県策定)および「屋久島憲章(同五年一〇月屋久町・上屋久町合同決議)」に代表される、島の自然や古くからの営みなどの再評価と、それに基づいた地域づくりを推進するための議論が、結果的に世界自然遺産へと波及・結実したとの意見が多くあげられた。以下では、登録後三〇年を迎えた屋久島の

現況を報告する。

環境を守るための枠組みづくり

屋久島環境文化財団は屋久島環境文化村構想を推進するため、平成五年に鹿児島県・旧上屋久・屋久町の出捐で設立、島内での環境学習や研究支援などを実施している。内田大信ひろのぶ同財団事業課長は「平成一五年から上屋久町の事業を引き継ぐ形で、研究者が島で何をしているのか住民に伝えるべく、専門家を講師とする『屋久島研究講座』を開催しています」と話す。年に複数回開講され、テーマも島の自然や文化についての多種多様な内容。近年はオンラインで島外からも受講できる回も

多いという。財団はこの講座の実施を含め、研究内容を島へ還元することを条件に、屋久島の生物多様性に関する研究に対して助成を行なっているが、来年度からは文化に対する研究も助成対象とする予定である。

平成二一年に島の自然・産業に関わる団体で設立した「屋久島町エコツーリズム推進協議会」。現在、一五団体が所属しており、財団も構成員となっている。同協議会では、「屋久島公認ガイド制度」や「屋久島町エコツーリズム推進全体構想」についての専門部会を設けている。屋久島公認ガイド制度は、ガイド業従事者の増加にともない、安全面や内容面でのばらつき改善を目指し、平成二八年に創設された。三段階の基準を設け、(先述の)研究講座や救命講習の受講など複数の条件をすべて満たした者を公認ガイドとして認定している。いま島では、ガイドの全体の半数を占める六〇名ほどが公認ガイ



屋久島環境文化財団の内田大信氏。

ドとして活躍している。

屋久島町エコツーリズム推進全体構想は、屋久島の自然観光資源やルールなどをまとめたもので、エコツーリズム推進法に基づき令和五年五月に環境省が認定した。これにより、法的根拠

をもって自然観光資源に対して保護措置を取れるようになった。「完成まで長い年月がかかった。構想をつくって終わりではなく、今後は人数制限なども視野に入れ検討を続けていく。先人たちが遺したものを自分たちの代で壊してはならない」と、内田課長は展望を語った。

島の魅力を伝えるガイド業

「ヤクシカは、サルが落としたり実を目当てに近くに現れるんです。シカはリラックスしているように見えて、ちゃんと警戒している。耳をピクピクさせているでしょ」

中馬慎一郎屋久島観光協会ガイド部会長に世界遺産登録エリアである西部林道を案内いただいた。周囲にはガジュマル、アコウ、シイ、ツバキなど照葉樹林が広がっており、道路には十数頭のヤクシマザルがたむろしている。林内では繁殖期を迎えたシカの縄張り

争いもみられた。中馬さんは屋久島出身。一度就職で島を離れ、北海道大雪山や沖縄の海など各地の自然を訪ねたのち、故郷の海と山を勉強したいと三〇歳で戻った。「魚の種数やウミガメの産卵など、他にはない屋久島の魅力に気づき、帰ってきてよかったと感じています。今でも、自分の島を知るために他の地域にも行くようにしているんです」

中馬さんによれば島のガイド従事者のうち三分の二はインターン者とのこと。「移住してきた人も、島で家族をつくって、子どもとともに行事にも参加している。両者の壁は薄まっているのではないかと、話す。中馬さんは、公認ガイドとして、「屋久島公認ガイド制度」が若い人たちの目標・基準になればと、期待を寄せた。

屋久島野外活動総合センター(YNA C)は世界遺産登録と同時期(平成五年七月)に設立されたエコツアー専門会



環境の連続性について解説する、YNACの市川 聡さん。

社である。設立以来、三〇年業務に携わる市川聡取締役企画部長は「世界遺産登録直後に来島者が増えた印象はななく、むしろ前年よりも減っていた。人が増えたのは高速船が就航した平成元

年で、その後も四年の高速船の増艇などアクセスの向上にもなっており増加した感じ」だと話す。

最近の来島者の傾向は、名所をいかに短い時間で巡れるかというオーダーがある点だという。しかし、YNACではゆっくり時間をかけて自然をみてもらうことを心掛けており、日帰りの縄文杉ツアーなどは行っていない。

また、その場その場のストーリーを伝える解説に力を入れてきた。「一カ所一カ所の価値を十分に知ってもらうため、地元が迎合してはいけぬ。いまは情報化社会ですぐに答えを知ろうとするが、思索を巡らせることも大事だと伝えていきたい」

自然を相手にするガイド業は体力仕事でもある。主要メンバーが還暦を過ぎ、新たなステージに進むため、YNACは三〇周年の節目を持って法人としての事業に幕を下ろすという。後人を託すべく、若いガイドの指導など、島

内での人材育成にも力を入れている。

スギとコケ、自然を活用した取り組み

町立屋久杉自然館に入ると、大きな杉が横たわっている。大雪で折れた縄文杉の枝の一部だ。館内は、屋久島の林業を主題に、かつて使われた斧やチェーンソー、記録映像などが展示されている。「林業、森を人が利用してきた歴史を伝えてきた。背景を知っていれば、自然を見た時、より得るものがあるはず。森を訪れる際の子習か復習の場として活用してほしい」とは、松本薫館長の言葉。同館は、世界遺産登録前の平成元年に開館。登録時の要件の一つに「地元の力で自然の価値を発信する意志がある」として、同館の存在が高く評価されたという。

屋久杉の活用については、現在は天然の杉を伐採することはなく、工芸品などには江戸時代の伐採時に遺された切り株である「土埋木」が使用されてい



細かく刻まれた屋久杉の年輪。500年で40cmに満たないことも。

る。しかし、それも限りがあるため、今後は箸などのより小さな物で活用し、細く長く使っていくとのこと。現在、木材として利用しているのは人が植林して育ててきた「地杉」で、天然杉ほど

ではないが、硬くて重く、腐りにくい特性を有する。役場の庁舎に代表されるように、町では今後この地杉の活用を推進していく方針だ。

島の自然を活かした、新たな動きも始まっている。町営屋久島総合自然公園の中にある植物園の一角では、地域おこし協力隊の大水孝介さんがコケの特産品化に取り組んでいる。「じつは屋久島は、北八ヶ岳や奥入瀬溪流と並んで、コケの三大聖地とされます。特に種数の多さが群を抜いており、日本の約三分の一にあたる六〜七百種が島に分布。標高差があることに加えて雨も多く、環境が変化に富むことが要因です。ヤクシマゴケなど、国内では屋久島で見られないコケも二〇種ほど生育していて、複数種が狭い場所に混在しているのも魅力」だと話す。大水さんはコケについて研究していた大学生時代に来島。関わった地域の人や雰囲気になじまれて移住を決意したという。

折しも屋久島町から、事業内容を応募側が考える「自由提案型」の地域おこし協力隊の募集があり、渡りに船だった。

島ではお土産屋などでコケの「テラリウム（植物などを育てることを目的とするガラス容器）」が販売されているが、現在は島外産のものが売られている。そこで大水さんは、地産化を目指してアラハシラゴケなど三種の栽培に着手。「人が楽しむ分は人の手で」をモットーとし、岩から剥がれ落ちた部分などを種ゴケとして栽培している。学生時代に訪れた島根県の生産現場を参考に、独学で栽培方法を模索している最中だ。なお、コケは、出荷サイズになるまで一年ほどかかるという。「一年目はコケ栽培に適した場所の選定に苦労した。特に風が強い場所だと新芽が飛ばされてしまう」と話す大水さんは、島内での栽培の普及を図るべく「屋久島コケ生産者の会」を立ち上げ、島の農家や



屋久島ジビエ王国の上村正太センター長(右)と秋田 修さん。

ガイドなど九名にやり方を教えている。「コケ栽培が島での新たな副業になれば。将来は生産者をとりまとめる「コケの農協」になりたい」

ヤクシカを活用した

ジビエ・レザー製品の提供

ヤクシカは島に生息するニホンジカの固有亜種。島の生態系の重要な構成要素である一方で、増えすぎると、固有の植物の消失や果樹の食害などをもたらす。そこで、国（環境省・林野庁）、県、町は管理計画を策定。くくり罠などで年間二千頭以上を駆除している。その鹿の有効活用を図ろうとしているのが、平成三一年開業の株式会社屋久鹿ジビエ王国だ。同社は適切な衛生管理などを示す農林水産省の「国産ジビエ認証」を取得。放血（現場で仕留めた直後の血抜き作業）から二時間以内を条件に、年間四〜五百頭の鹿を受け入れている。町の「野生鳥獣食肉処理施設整備事業」を活用して整備した加工施設は、鹿を運び込み洗浄する部屋、枝肉へと処理する部屋、熟成する冷蔵庫など、解体プロセスごとに部屋が分かれ、清潔に保たれている。

「適切な処理をした鹿は臭みが少ない。おすすめ部位はタン（舌）で、クリミーな味わい」と、上村正太センター長は語る。食肉は島内の飲食店を中心に卸しており、住民が直接買える直売も実施。保育園給食にも提供している。脂質が少ないシカ肉はペットフードとしても適しており、島外に出荷。購入者からは「犬の毛並みが良くなった」などと評判も良いようだ。さらに、加工の際に出る鹿革は島内で革製品を作している「Rigger」に卸すなど、余すことなく活用している。

地域資源を最大限活かした教育

島内唯一の公立高校である県立屋久島高校。二年時に選択できる普通科「環境コース」では、島の自然や文化についての授業や実習が行なわれている。学校の先生だけではなく、講師に環境文化財団やY N A Cの専門家を招聘するなど密度の濃い内容だ。三年時は島

に関する自主研究に取り組み。テーマは文理問わず多岐に渡り、少人数である利点を活かして生徒一人につき先生一人がサポートにつくという。

三年生の柴崎俊太朗さんと日高朔

さんは、ともに島外からの地域みらい留学生。それぞれ「屋久島におけるオキナワキノボリトカゲの生態」と「岳参りのこれまでとこれから」をテーマに、研究を進めている。二人とも、卒業後は進学して関連分野についてさらに学びたいと、決意を語ってくれた。島内出身で二年生の河口悠真^{ゆま}さんは「昔から自然の中で遊んでいたが、ズーフイコス（生痕）化石が島にあることなど、授業や実習で初めて知ることや発見がたくさんある」と話す。河口さんは、夏休みに海水浴場でライフセーバーを務めた経験から、人を救う仕事に興味を持ち、将来は島で消防士になりたいという。同じく二年生の芝原青空^{せいく}さんは、祖父が島のタンカン農家。「研

究は外来植物をテーマに、島の環境に合った除草剤を開発したい。将来は島でインストラクターとして島の環境教育に携わりたい」と語った。

●

世界自然遺産登録から三〇年。屋久島の自然の保全・利活用は、人材や経験がしっかりと蓄積され、円熟に向かっている印象である。古来、島で受け

継がれてきた自然・文化を尊重し、地域資源として活用していくことを決めた、上述の二つの枠組みが結実したといえる。荒木耕治屋久島町長らはシンポジウムで「かつては屋久島出身といっても、島外では通じなかったが、世界遺産を機に誰もが知るようになった」と、この間の変化を口にし

た。登録により、地域の価値が広く周知されたことが、住民のシビックプライドの向上にもつながっている。自然と共生する屋久島の地域社会は、これまでのノウハウと若い力が一体となり次の一〇年に向けて着実に歩みを進めていくだろう。

（文・石川／写真・小原佐和子）
（本号巻頭グラビアもあわせてお読みください）



屋久島高校環境コースの生徒たち。